



清野 伸昭

一般社団法人東北経済連合会 副会長

先人の英知に学び、まち賑わい創出へ

「出羽の山形というところは江戸の政治地図の中であれども、無きがごとき小藩であった。たとえば秋田の佐竹、庄内の酒井、米沢の上杉と数えて、山形のだれと、藩主の名を知るものはいない」一。作家石川淳が『諸国崎人傳』の中で、山形について記した一文です。それも致し方ないことでした。明治維新まで山形は何代も城主が代わっています。

しかし、今から400年前、山形には全国の戦国大名で6番目の禄高を有する殿様がおりました。最上義光(よしあき)公(1546～1614)です。関ヶ原の戦いにおいて徳川方についたことも預かり、甥の伊達政宗公に匹敵する57万石の大大名となり、その領地は庄内・由利(秋田)にまで及びました。「仁義をもって諸士を撫で 無欲をもって国民を憐れむは謀り事(政治)の第一と覚え候」を信条とし、城の普請は城下の民に労苦を与える、と館の改修を進言した重臣の申し出を退ける名君でした。

義光公は城下街道沿いに市日町、職人町をつくり、近江商人はじめ外来商人の自由貿易を積極的に進め、年間3万人にも及ぶ出羽三山参詣者と合わせ、その賑わい、繁栄ぶりは東北随一と称されました。中でも最上川の難所を開削した事業は舟運の活況をもたらし、紅花を主とする上方との交易を盛んにし、大規模な水利事業は庄内平野を大いに潤しました。まさに今日の山形の礎を築いた為政者でした。

没後8年、後継者を巡って家臣同士が争い、幕府に改易を命じられました。以来、山形は「政治地図の中にあれども無きがごとき小藩」が約240年間続くこととなります。しかし、義光公の業績は脈々と伝えられ、明治、大正、昭和30年代半ばまで毎年秋、「義光祭」と称する市民総出の祭りが行われていました。

昭和40年代に入るといつしか義光公の存在が市民の間から希薄となりました。ひとつには、「家督争いをめぐり弟を殺害した」「帰参せず反抗的態度をとった城主を謀殺した」など裏付け資料のないまま『山形市史』に記載され、それを基にしたNHK大河ドラマ「伊達政宗」が放映されるや、非道な謀略家のイメージがひとり歩きしてしまったことがありました。まことに残念なことです。

そうしたイメージを払拭、義光公の業績を再認識し、今後のまちづくりに生かそうとの思いを込めて山形市では今、「没後400年記念事業」が行われています。思えば公の存在が希薄となったのは、誤ったイメージとともに、本格的な大量生産・大量消費時代の到来と重なっています。軌を一にして中心市街地は疲弊し始め、まちなかから賑わいが失われました。まちづくりへの関心もまた希薄となった時期でもあります。

日本商工会議所は、「まちづくりに関する意見～コンパクトシティの実現と地域商業の再生との融合」の中で、まず第一に「理念を共有する」ことを掲げています。その理念とは何か。先人たちの英知に学ぶことも理念模索の一つの手だてではないか、と思っています。

なお、10月には記念事業のメインである武者行列、シンポジウム、関ヶ原の合戦と時を同じくした最上・上杉合戦の再現が行われます。どうぞ足をお運びください。

(山形県商工会議所連合会 会長・せい のぶあき)